

知的オフィス環境推進協議会

2021年2月特別研究会 報告書

1. プログラム

◆日時：2021年2月25日（木）15：00－17：00

◆開催方法：オンライン方式（Teams の予定）

◆内容

14:45-15:00 オンライン接続テスト

15:00-15:05 オープニング 会長

15：05－15：35

◆講演1「ウエルビーイングなオフィス – 昼光および色温度可変型 LED 照明光のメラノピック等価照度について –」

三木光範（同志社大学名誉教授） 要旨：近年、WELL 認証でも取り入れられたワークプレイスにおけるメラノピック等価照度（EML）が注目されている。ここでは、EML とは何か、EML の測定方法、昼光の EML の方角や時間による違い、色温度可変型 LED 照明下の室内での EML、およびオフィスにおける EML 連続測定方法などについて述べる。

15：35－16：35

◆講演2「コロナ禍で働くということ： 2020年の緊急事態宣言下の大企業、中小企業、労働者に起こっていたこと」

藤本昌代（同志社大学社会学部 社会学科教授）

要旨：本講演では、2020年春の緊急事態宣言下発出の際、私たちに起こったコロナ禍での生活の中で「働くということ」に対して、これまでの「常識」が通用しない状況で人々はどのような状態にあったのか、パンデミック直後の混乱期を捉えた調査記録をもとにお話をさせていただきます。用いるデータは、大企業への調査(2020年4月)、京都市の中小企業への調査（2020年5月、経営者へのインタビュー 7月）、内閣府が行った一般の人々へのコロナ禍での生活調査（二次分析）です。量的データ、質的データからコロナ禍前後の組織における物理的、精神的不安の状態、組織の構造的な要素、社会階層上の要素などの観点から分析します。このような科学技術と社会の両方の問題が同時に起こる社会現象を経験した私たちが次に考えるべき、社会デザインについて一緒に議論できればと思います。

専門分野：仕事の社会学、専門職の社会学、組織社会学、科学技術と社会、社会心理学、他

<https://www1.doshisha.ac.jp/~mfujimot/profile.html>

著書：「欧州の教育・雇用制度と若者のキャリア形成：国境を越えた人材流動化と国際化への指針」、「専門職の転職構造」、「産業集積地の継続と革新」など。

16：35－16：55 総合討論

16 : 55 - 17 : 00 クロージング 会長

2. 関係者への礼状

同志社大学社会学部

藤本昌代先生

写 : 運営委員各位、ご参加者各位 (BCC)

三木です。

本日は知的オフィス環境推進協議会の2月特別研究会でご講演をいただき、誠に有り難うございました。

コロナ禍での各企業の課題や、働く人たちの意識の変化など、社会学的に貴重な社会の変化に直面し、藤本先生や学生たちが調査し、企業の規模や創業年、業種などでの分類で、各企業が抱える問題を浮き彫りにし、そこで働く人の満足度や心配などを男女別や年代別に明らかにされたこと、その調査報告は大変有益な内容でした。また、調査結果から導き出される意味はとても興味深く、コロナ禍が人に与える影響の深さも改めて深く知ることができました。

特に、中規模の製造業が最も落ち込みが少なかったこと、創業年の古い老舗企業と大企業がコミュニケーション不足に陥っていること、各都道府県の生産額とコロナ問題の大きさがほぼ比例していること、若年層の仕事観や社会観が最も大きく変化していること、コロナ禍で仕事の満足度は男女とも落ちているが、女性の方が男性より満足度が高いこと、社会的資本（繋がり）は、コロナ前では企業内、企業間で盛んに行われていた交流会（飲み会）がなくなり、その影響が後遺症として出てくること、オンラインやDXが進んでも、対面でのコミュニケーションの重要性は変わらず、東京一極集中はなくならないこと、安価な女性の労働力に依存していた企業の落ち込みが激しいことなど、社会学的な考察は大変有益で、勉強になりました。

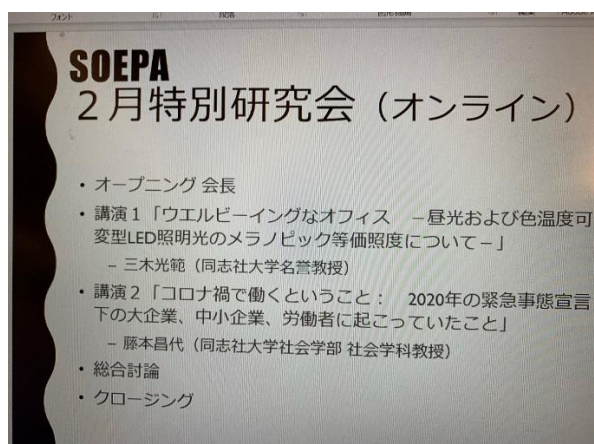
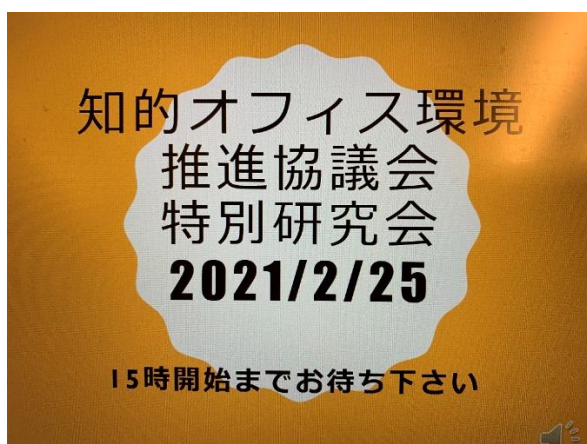
最後の討論で藤本先生が仰った「社会的筋肉」、すなわち親しい友人以外の人とリアルに会う体力が落ちてきており、人と会うのが面倒という若者が増えていることで、その後遺症はかなり大きいのかなと思っています。恋愛するのが面倒という理由で結婚しない人が増えているとテレビなどで聞いたことがあります。何でもスマホとオンラインで済ませる若者にとっては、人と会う少しのバリアでさえ超えるのが難しくなるとすれば、社会的紐帯は浅くなり、社会はその分、浅くなり、狭くなると思います。まさに、いつでもどこでもオンラインで繋がるようになれば、わざわざコストをかけてリアルに対面する必要性は大きく減少すると思います。締切がない原稿はいつまで経っても完成しないように、我々の社会から制約を取り除く度に、新たに大きな問題を抱え込むような気がしています。

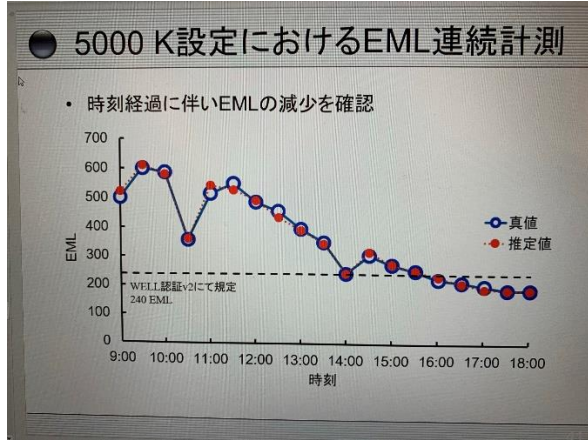
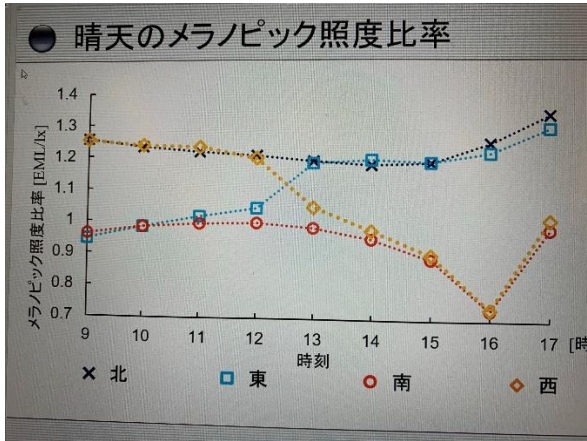
なお、私の話は少し専門的で、分かりづらかったと思います。照明に関する人のウェルビーイングを認証する国際的な団体がオフィスでの照明の品質を定めていることに関する新しい話題です。簡単に言えば、人はもっと太陽光を浴びるべきだということで、シンガポールやオーストラリアなどでは小学生が毎日2時間以上、太陽光を浴びるように学校に求めているようです。これをオフィスで行うには、ビルの窓を大きくし、デスクは窓に向かって座り、窓から8m以内になること、人工的照明でそれを補完するには青白い色の照明で、明るくしなければいけないという事です。

ただし、日没後は逆に白く、明るい照明は駄目で、オレンジ色で暗めの照明にする必要があります。これで睡眠障害を防ごうということで、ビルの健康的な光環境になります。ただ、省エネルギーの観点からはタスクライトとアンビエント照明（周りの全般照明）の併用が効果的ですが、タスクライトは机の上だけを照らすため、目に光が入らず、日没後は良いとしても、午前中や昼間にタスクライトを使うのは良くないという結論です。タスクライトは窓にむいている時に、太陽光だけでは机の上の照度が不足する時だけに使うのが良いということになります。こうした等価メラノピック照度を考えると、オフィスの照明設計は非常に難しく、オフィスが必要以上に明るくなり、集中度や創造的思考にむかなくなるという欠点も生じます。このため、問題は極めて複雑で、健康を重視するか、人の快適性や知的生産性を重視するかでソリューションが異なってくるという価値観の問題に還元されるのです。何事もバランスが重要となるという結論は簡単です。

それでは、機会があれば先生と議論したく、今後ともなにとぞ宜しくお願い申し上げます。本日は誠に有り難うございました。先生の今後のご活躍を期待しております。

3. 関連写真





● 昼光利用時の照明の課題

- 壁面が全面窓(透明ガラス)の場合、壁面から約8m以内の人の机上面照度は、昼光だけで150 lx以上ある。
- このとき、窓面に正対しない人の顔面鉛直照度は50 lx以下となり、EMLは天井照明に依存する。
- タスクライトはEMLに有効では無い。TL使用不可。
- 窓から遠い場所では着座方向に関係なく天井照明が必要

タスク照明無しで
5000 K, 640 lx
または
3000 K, 1070 lx

TLではEMLが
増加しない
使用不可

